

[特別企画3]

高校生の献血を「見える化」 —キーワードは「花」—

吉田朱里、江戸屋裕次、大田佳子、佐伯俊也、伊藤篤延、林 勝知
岐阜県赤十字血液センター

【はじめに】

いま、血液事業は、若年層献血者をいかにして確保するかが喫緊の課題となっている。

当献血ルームは、岐阜県内に3カ所ある固定施設の中でも、とりわけ10代～30代の占める割合が高い(45.8%)。その強みを生かした取り組みとして、高校生の献血を「見える化」することを試みた結果、新たな献血者の増加に繋がったので報告する。

【背景】

当献血ルームは、平成27年度に「見える化」ということで、高校生に献血協力を感謝すること、高校生の身近な人にも献血に協力していただいていること、献血が誰にでも安心して行えることを伝えることなどを目的とし、年間の高校別献血者数を棒グラフで示し、献血者待合室の壁に掲示した。しかし、棒グラフに興味を示す献血者は多くはなかった。

そこで、多くの高校生が「献血に参加している」という実感をより強く持ってもらうにはどうしたらよいかをスタッフと検討し、平成28年度は以下の取り組みを行った。

【対象および方法】

平成28年度の高校生献血を「見える化」するため、「献血で愛の花を咲かせよう」と題して、岐阜県内の高校(82校)に通う高校生を対象とした参加型プロジェクトを立ち上げた。内容は以下の通りである。

- 木のイラストと高校名をデザインした台紙(A5版)を学校ごとに作成した(図1)。献血に

ご協力いただいた高校生に自分の学校の台紙へ、花のシールを貼ってもらった。

- 高校別の台紙を献血者待合室の壁面に貼り、「献血で愛の花を咲かせよう」コーナーを設けた(図2)。学校間の協力回数を煽らないように、台紙は来校順に貼るように配慮した。
- 新規の献血者で、貼る学校の台紙がないときには、新しい台紙を作成して対応した。

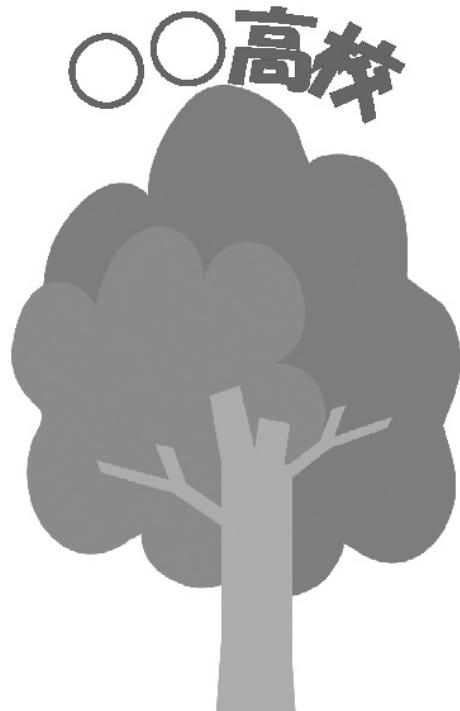


図1

【結果】

プロジェクト開始から1年後、当献血ルームの待合室の壁にたくさんの花が咲いた(図3)。

高校生が台紙に近寄って花の数を数えるという風景が1年を通じて見られた(図4)。

高校生に限ると、平成27年度525名から平成28年度563名と、前年比38人増(107.2%)となつた。学校名を掲示することで、同世代の献血が見

えることに繋がり、献血に興味を持っていただくきっかけづくりとなつた。また、高校生だけでなく、関心を持っていただいた先生が、授業の中で献血のお話をされ、先生から生徒に献血が繋がつていることがわかつた。さらに、一般の献血者も待合室の「花」を見て、高校時代の話に「花」が咲き、中には母校を見つけて記念写真を撮られる方もいる等、今回のプロジェクトにより年齢を超え



図2

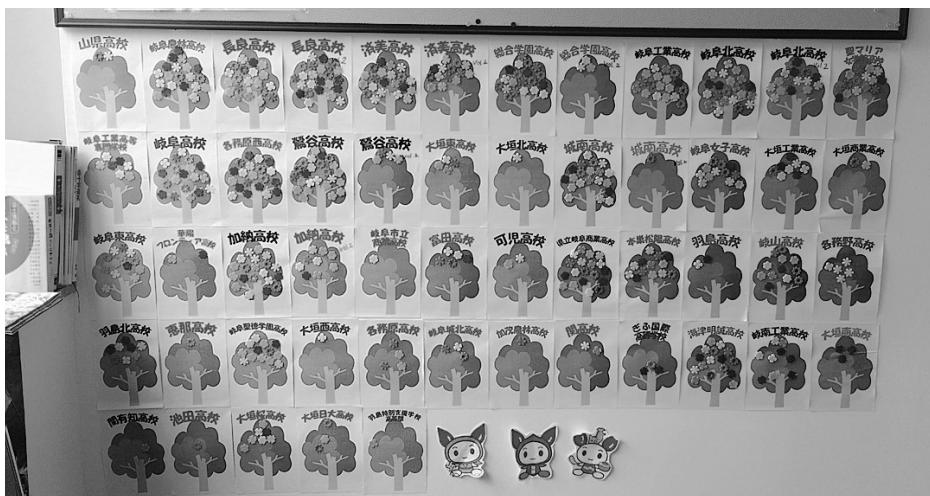


図3



図4

て多くの人々に好評を得ることができた。

【考 察】

今回実施した献血協力の「見える化」は、市販の紙と「花」のシールを使うことで費用をほぼかけずに始めることができた。また、高校生にとどまらず、幅広い年代の方に献血に関心をもってい

ただくきっかけになったことは、単に献血者数を伸ばすだけでなく、話題性という点でも効果があったと考える。

今回、献血者への善意を「花」という見える形で表現することで、献血が拡散していくことが実感できたので、今後は献血協力の「見える化」をさらに進化させていきたい。